The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Scènes de la vie privée の世界 : La Comédie humaine 論への序章として
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1975, 8, p. 5-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47739
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

*Scènes de la vie privée*の世界

——*La Comédie humaine* 論への序章として——

柏　木　隆　雄

I

1842年当代フランスのあらゆる社会現象を、あらゆる階層、あらゆる地域に亘って描き出そうとする壮大な意図の下に、*La Comédie humaine*という総題を冠して世に問うた時、Balzacは、かの有名な序文において、1829年前後から精力的に書きためてきた長短の作品群を、恰も一巻の19世紀叙事詩として再編し一般読者に提供すると共に、彼自身の、歴史、社会に対する挑戦状を披露した。彼がこの前人未踏の大業を思いつくに至った過程は、Hanska夫人を始め出版者、友人達宛の書簡集で一応明らかである[(1)]し、*La Comédie humaine*の総題の由来も既に多くの研究者の言及しているところであるので繰り返さない[(2)]。いずれにしても彼は、著作を*Etudes de mœurs*と*Etudes philosophiques*そして*Etudes analytiques*と三部に分ち、更に*Etudes de mœurs*を*Scènes de la vie privée*, *Scènes de la vie de province*, *Scènes de la vie parisienne*, *Scènes de la vie militaire*, *Scènes de la vie de campagne*と細分して各作品を充てている。このような作品群のプランからみると、*La Comédie humaine*は一つのピラミッド的宇宙、底辺には、広く19世紀フランスの歴史的、地理的、心理的観察からなる長短篇、その上に、それよりsymboliqueな意味を持たせた抽象的観念小説、言い換えればBalzac的哲学を小説の形で表現したもの、そして頂点に、たとえば*Phisiologie du mariage*といったような、Balzac思想の要素をエッセイ風に

まとめあげたものを位置させるという、相当精緻な枠組が出来上がっていたように思われる。彼の諸作品をある一つの統一性をもたせてまとめあげるという企図は、Balzac 自身も述べているように[(3)]、1830年頃から、たとえば *Scènes de la vie privée* と題して数篇出版している例などに見られるが、最終的に Balzac の意図を盛り込んだと思われる1845年の Catalogue は、単に計画であったり、未定稿に過ぎぬものを含めていても、明らかにはっきりした統一性を持つように按排されているようだ。それは、1834年の計画では、48巻であったものが26巻に整理され、*Scènes de la vie privée* 4巻、*Scènes de la vie de province* 4巻、*Scènes de la vie parisienne* 4巻、*Scènes de la vie politique* 3巻、*Scènes de la vie militaire* 4巻、*Scènes de la vie de campagne* 2巻と、殆ど均等に割当てられ、*Etudes plilosophiques* が細分されずに3巻、*Etudes analytiques* が1巻という、整然としたピラミッドの形をなすかのような配列の工夫に見ることができる。Balzac の死 (1850) によって、*La Comédie humaine* は完璧な姿では実現しなかったものの、以後の編集者達の多くは彼の意志を尊重して Catalogue に準拠している。しかし Balzac 自身、生前同じ作品を、題を変えたり、内容に改変を加えたり、またある *Scènes* から他の *Scènes* へと置き換えたりした事、retour des personnages という *La Comédie humaine* とはきってもきれぬ関係にある作者独特の技法と関連して、先の Balzac 自身の計画した Catalogue とは別の編集もなされている。1911年 Renaissance du Livre から出た全集は、執筆時期に注目して編んだ所謂編年体全集であるし、Albert Béguin 等の編集になる Club français du Livre 版 (1950) では、作品の筋立、登場人物の chronologie を重視して作品を編纂し直して、大きく *Etudes de mœurs, Romans du passé, Etudes philosophiques, Etudes analytiques* と分け、*Etudes de mœurs* では各 Scènes にわけず、La fin de l'Empereur, La Restauration — Louis XVIII, Charles X, La monarchie du Juillet という4つの時代区分にわけ、その時代にあてはまる小説を年

代順に配列するという異色の試みをしている。[4] これらの編集方法も確かに興味深いが、果してそれが、Balzac の世界を一層吾々に明らかにするかどうか。前者の編年体については、書き変えや、書き加えが何度も行われた作品、たとえば *La femme de trente ans* の如き、短篇、中篇のオムニバスの形式をとった作品など、正確な執筆時期を決定するのは困難であろうし、作品のストーリィや登場人物の年代順を考慮して編むという Béguin の方法も、読者にパノラマ的視野と興味を与えるにせよ、その年代に不統一や錯誤の見られる以上、どこまで具体的統一を図れるかという疑問は残る。この小論においては、Balzac の1845年の Catalogue の配列を尊重し、*Scènes de la vie privée* を *La Comédie humaine* という一大長編小説の第一部として読み、従来個々の作品の意味において研究されることの多かった編中の作品群を、それ自身として如何なる構造と統一性をもつものか検討してみたい。

II

Balzac が *Scènes de la vie privée* という名の下に作品を集めて上梓した最初は、1830年、7編2巻本であり、32年更に8編を増補して4巻本として出され、翌33年には、*Etudes de mœurs au 19 siècle* という構想を明らかにして、34年若い友人 Félix Davin の筆を煩らわせて、序文を附し、他の Scènes と共に7篇4巻として組みいれている。この際の収録作品は、たとえば *Recherche de l'absolu* がこの *Scènes* に収められているなど、必ずしも現行のものと等しくないが、この *Scènes de la vie privée* の genèse については、ここでは触れぬことにして、Balzac の1845年の Catalogue における *Scènes de la vie privée* のリストを見てみよう。

SCENES DE LA VIE PRIVEE (4 volumes, tomes I à IV)

1. *Les enfants.* 2. *Un pensionnat de demoiselles.* 3. *Intérieur de collège.* 4. La Maison du Chat-qui-pelote. 5. Le Bal de Seaux. 6. Mémoires de deux jeunes mariées. 7. La Bourse. 8. Modeste Mignon. 9. Un début

dans la vie. 10. Albert Savarus. 11. La Vendetta. 12. Une double famille. 13. La Paix du ménage. 14. Madame Firmiani. 15. Etude de femme. 16. La Fausse Maîtresse. 17. Une fille d'Eve. 18. Le Colonel Chabert. 19. Le Message. 20. La Grenadière. 21. La Femme abandonnée. 22. Honorine. 23. Béatrix. 24. Gobseck. 25. La Femme de trente ans. 26. Le Père Goriot. 27. Pierre Grassou. 28. La Messe de l'Athée. 29. L'Interdiction. 30. Le Contrat de mariage. 31. *Gendres et belles-mères*. 32. Autre étude de femme.

(イタリックは未刊の作品である。)

現行諸版の *La Comédie humaine* では、更に、作者の Furne 版書き入れの指示を守って、配列の順序に変更を加えている。たとえば18番目の *Le Colonel Chabert* は26番の *Le Père Goriot* の次へ、27番の *Pierre Grassou* は *Scènes de la vie parisienne* に移されている。[6] これは小さな事のように思われるが、実は *Scènes de la vie privée* の構成を考える上で甚だ意味深いものである。というのも、現行の最終プランに沿って各作品を読んでいくなら、*Scènes* 中の長短各篇は一見無造作に配列されているように見えて、なお或る一貫した流れの上に展開していく事に気づくからである。それはCatalogue に題名しか表わされていない作品をそのプランの上に置いてみても同様である。*Scènes de la vie privée* は、大きく未婚の青年男女と既婚の男女の物語、つまり la vie privée の諸相を描いているわけであるが、それが、発展的な étape の上で語られている事がまず注目されるのである。*La maison du Chat-qui-pelote* から *La Vendetta* までの８篇(これに未完の *Les enfants, Un pensionnat de demoiselle* 等が加わるが) は、若い男女の恋愛を中心として、彼等の心理と行動を描く一連の物語であるが、巻頭の *La Maison du Chat-qui-pelote* の伝統的な羅紗地屋の姉妹の二人二様の結婚相手の選択とその結果に象徴的に表わされるように、異った type の娘や青年達が織りなす悲喜劇であり、*Une double famille* から最後の *Autre*

étude de femme 迄の各篇はそうした娘達の後日譚とも言うべき様々な人妻の type が置かれている。しかもそれらは、*Une double famille* の Mme Granville の過度に vertueuse な女性から、la comtesse de Soulange (*La Paix du ménage*)、Madame Firmiani (*Madame Firmiani*) の如き賢明で貞淑な女性が扱われ、次の *Etude de femme*, *La Fausse Maîtresse* の主人公達は、貞淑な人妻に終始するものの、精神的には criminelles であり、*Une fille d'Eve* の héroïne は、危うく夫を裏切る寸前に助けられることになり、そして、次の *Le Message* から *Honorine* に至る作品の女性達は、夫を裏切っている femmes criminelles であるが、しかし愛人に死なれたり (*Le Message*, *La Grenadière*)、或いは背かれたり (*la Femme abandonnée*) して苦しんでもいる。そして、*Béatrix* から最後の *Autre étude de femme* に描かれる女性達は、夫や愛人を裏切っていたりしながら、その事で弱々しく悩んだりするよりは、積極的に所謂 société と立ち向かおうとする type として描かれている[7]等、この *Scènes* の諸篇は、物語の女主人公に視点を定めてみると一つの段階的発展の流れに沿って順序だてられると言える。しかも、いみじくもその題を持つ短篇で締め括られているように、Etude de femme という統一的なまとまりを示していると言えるだろう。これは、単に女主人公が、娘→人妻→貞淑な妻→不貞な妻と変換していくという図式が引けるからだけではない。一見無作為に配列してあると思われる *Scènes* も、各篇がそれぞれ、緊密な関連の要素をもっていて、それが、*Scènes* 全体の拡がりと深さに貢献していることを示唆するからである。さて *Scènes de la vie privée* の各篇が上に述べた図式で展開していく事を確認したあとで、各作品間の連繋の要素を探ってみよう。

III

L'invention par contraste et l'invention par analogie, voilà donc les démarches naturelles de l'imagination de Balzac.

という言葉にもあるように[8]、まず各々の作品が、antithèse と analogie の組み合わせによって *Scènes de la vie privée* の世界を作り、読者の理解と想像力を助長していく事をあげなくてはならない。たとえば、*La Maison du Chat-qui-pelote* の姉妹の対照的な性格と運命は、*Mémoires de deux jeunes mariées* の Louise と Renée，更に、*Une fille d'Eve* の二人の Marie と、analogique に舞台を変えて展開しているし、又、羅紗地屋 Guillaume 家の妹娘 Augustine の運命を、旧大貴族の娘に変えれば Emilie (*Le Bal de Sceaux*) や Ginévra (*La Vendetta*) となる。彼女達は、共に古い家柄を誇る父親に深く愛されて育つが、その父親の反対を押して、身分の違う青年を愛するに至り、悲惨な結末を得る héroïnes である。そして彼女達の antithèse として、Adélaïde (*La Bourse*) や Modeste Mignon (*Modeste Mignon*) が対置される。自分の身分に相応しい夫をと Maximilian を斥け乍ら結局老 Kergarouët 伯と結婚する羽目になる Emilie に対して、Modeste Mignon は、詩人 Canalis への憧れから、Erneste の誠実な愛に醒まされ、父親の理解の下に幸せな結婚をするし、Adélaïde は誠実な画家 Shinner と、Augustine とは対照的に幸福な結婚をする。一方 héros についても analogie や antithèse を指摘する事が出来る。たとえば兄弟に爵位や財産を譲って自分は一市井人として生きようとする Maximilian (*Le Bal de Sceaux*) や Don Félipe (*Mémoires de deux jeunes mariées*)、強い友情と信頼で結ばれた Charles Mignon と Dumay の主従関係は、M. de Lasinski と Tadée Raz (*La Fausse Maîtresse*) にも、Comte de Bauvan と Maurice de l'Hostal (*Honorine*) にも見られるし、自分の才能を恃んで女性を踏台に野心を遂げようとする Canalis (*Modeste Mignon*) や Raoul Nathan (*Une fille d'Eve*)、愛する娘や妻の為に自分を犠牲にする Père Goriot や Colonel Chabert 等々類似の性格や役割を負った人物を認める事ができる。更に彼等は同時にその antithèse を持って一層具体的な image を持つのである。誠実な Shinner に対しては Sommervieux，又 Dumay，Tadée に

対しては、不忠な執事 Morreau (*Un début dans la vie*)、純情な恋人Calyste に対して誘惑者 La Palferine, というように、*Scènes de la vie privée*の主要登場人物を、その役割と性格別に、作品の順序に列べてみれば、こういった antithèse と analogie が巧みに織り込まれ、その振幅の相乗効果によって、各作品の連繋の深さと興味を与えていることが理解されるだろう。(9)

Antithèse と analogie の効果に加えて、周知の retour des personnages が、この作品群に unité を与えている第二の重要な要素としてあげられる。この Balzac 自身も自負する技法については、既に幾つかの研究がなされており、(10) ここで繰り返す必要もないが、*La Comedie humaine* 巻頭第一部の *Scènes de la vie privée* を虚心に読み進む場合、この retour des personnages の技法は、大きく三つに分けられよう。それは、まず第一に、同じ人物の名が幾篇かに亘って繰り返される単純な場合、たとえば、*Le Père Goriot* で Rastignae が Mme Bauseant の夜会で社交界に紹介される場面の

> Il avait eu le bonheur de rencontrer un homme qui ne s'était pas moqué de son ignorance, défaut mortel au milieu des illustres impertinents de l'époque, les Maulincourt, les Ronquerolles, les Maxime de Trailles, les Marsay, les Adjuda-Pinto, les Vandenesse, qui étaient là dans la gloire de leurs fatuités et mêlés aux femmes les plus élégantes, lady Brandon, la duchesse de Langeais, la comtesse de Kergarouët, madame de Sérizy, la duchesse de Carigliano, la Comtesse Ferraud, madame de Lanty, la marquise d'Aiglemont, madame Firmiani, la marquise de Listomère et la marquise d'Espard, la duchesse de Maufrigneuse et les Grandlieu.(11)

とか、又 *L' Interdiction* の一場面に

> Parmi les hommes encore jeunes auxquels l'avenir appartenait et qui se pressaient dans ses salons aux grands jours, se remarquaient messieurs de Marsay, de Ronquerolles, de Montriveau, de la Roche-Hugon, de Sérizy, Ferraud, Maxime de Trailles, de Listomère, les deux Vandenesse, du Châtlet, etc.(12)

等 *Scènes de la vie privée* の各篇のいずれかで何らかの役割を果している人物が他の作品でさほど主要な役を負わずに登場することが屢々ある。これは、一見無造作な員数揃えとか安易な繰り返しとして見過されがちであるが、しかしその効果は決して少なくなく、たとえば、新しく読む作品に、先に登場している人物の名が現われるだけで親近感が生れ、更に、彼等の名の背後に、先の作品における彼等それぞれの物語を同時に想起させて、その作品に厚みと réalité を与えるのである。*Honorine* における、Maurice de l' Hostal, comte Bauvin, comte de Sérizy, comte de Grandville の打ち明け話の場面をその一例としよう。

> Nous connaissons â nous trois la question â fond, dit en riant le comte de Grandville. Moi, j' ai une femme avec laquelle je ne puis pas vivre. Sérizy a une femme qui ne veut pas vivre avec lui. Toi, Octave, la tienne t' a quitté. Nous résumons donc, â nous trois, tous les cas de conscience conjugale.(13)

Sérizy 伯は又こう言う。

> Monsieur de Sérizy changea la conversation en racontant tout ce qu' il avait fait pour plaire â sa femme sans y parvenir jamais.(14)

先の *La double famille* における苦悩に打ち拉がれた Grandville や、*Un début dans la vie* における、妻の不貞を公然と Oscar に暴かれて激怒する Sérizy を知っている我々には、*Honorine* での、自嘲をこめた二人の打ち明け話も、その image の裏打ちがある故に強くせまってくるのであり、この小説の主人公 Octave と彼の妻 Honorine の不幸も、前二者のそれと重なりあって、一層印象づけられるのである。このような例は Marsay (*Le Contrat de Mariage, Autre Etude de femme*), Maxime de Trailles (*Béatrix, Gobseck*), Mlle des Touches (*Honorine, Béatrix*) の登場の仕方にも見られ、語り手としての Dervile (*Gobseck, Colonel Chabert*), Bianchon (*La Messe de l'Athée, l'Interdiction*) 等にも見られるだろう。

retour des personnages の技法の二番目に、再登場する人物の描写の

段階的発展という事があげられる。つまり先に allusion で素描された人物が、次に読者の目に触れる時には、更に詳しく、主要な役を帯びて登場する例である。例をたとえば Rastignac にとろう。まず *Le Bal de Sceaux* では彼は単に、

—— Qu' as-tu à dire contre monsieur de Rastignac?

—— Madame de Nucingen en a fait un banquier, dit-elle malicieusement.[15]

とだけ他人の口に上るにすぎないが、*Etude de femme* では、Beauséant 夫人の salon に出入する伊達男として登場し、

> Eugénie de Rastignac est un de ces jeunes gens très sensés qui essaient de tout, et semble tâter les hommes pour savoir ce que porte l'avenir.[16]

そして *Le Père Goriot* に至って初めて地方から出てきた初心な青年として現われる。彼が Mme Vauquer の下宿の醸し出す雰囲気と Paris の社交界の持つ眩惑的な世界とを行きつ戻りつしながら、ついに Goriot を墓地に葬った夕暮、À nous deux maintenant ! と、それ迄の青年らしい正義感と sentimentalisme に訣別し l'arrivisme と社会への対抗意識に燃えて "Paris の海原" へと乗り出して行く過程は、ここで詳しく述べる必要はあるまい。彼のような登場の仕方は、他の人物についても随処に見られ、*Mémoires de deux jeunes mariées* で

> Mon ami n'a pas d'autre nom que ceux de Marie Gaston. Il est fils, non pas naturel, mais adultérin de cette belle lady Brandon, de laquelle tu dois avoir entendu parler, et que par vengence lady Dudley a fait mourir de chagrin, une horrible histoire que ce cher enfant ignore.[17]

と触れられている lady Brandon の物語は、*La Grenadière* に於いて詳しく抒情的に描かれるし、又 *Albert Savarus* で、Albert に、Genève での恋の逃避行の身を羨やまれる Beauséant 夫人は、*La femme abandonnée* の Héroïne として、その悲劇が展開されるというように、予め触れられた人物が、先の物語の中心的人物として語られる例は、*Scènes* の中で容易に見

出される。勿論この事は各作品の genèse を一応無視し、最終的な作品配列を尊重した上で言える事である。既に知識として Rastignac その他の登場人物を出版年代の違う諸作を通して得ている者には、retour des pesonnages の効果とは言い難かろう。しかしこれまで見てきたように、*Scènes de la vie privée* は、少くとも一つの流れの上に諸作品が乗っているのであり、*La Comédie humaine* の一部として最初から一作一作未知のものを開拓して読む態度、おそらく Balzac が *La Comédie humaine* としてまとめあげようとした時、後世の読者に期待した態度で読めば、retour des personnages の第二番目の意味を汲みとる事ができる筈である。つまりこれは、大衆小説にも見られる一種の後戻り効果とでも言おうか、先の個所で、ある人物の到達点を示し、後段でそのよって来る所を述べるのである。そうする事によって、その人物の描写は、豊かさを増し、最初の短い話で好奇心を唆られた読者は、一層興味と親密さを持ってその人物と取り組むことになる。*La Comédie humaine* は、いってみればこうした personnages が、物語の展開に従って他の personnages と関わりを持ちつつ次第に各々の性格を明らかにしていく一大ドラマなのである。そこで、retour des personnages の三番目の効果が重要となる。それは以上述べてきた二つの事とも関連があり、とりわけ、*Scènes* の配列にも意味を与えるものであるが、次に続く作品で登場する人物、或いはその人物と深い関りをもつ人物が、その前の作品に登場していて、読者にその世界の関連性を意識させるものである。たとえば *Le Bal de Sceaux* で Emilie と結婚する事になる好人物の老 Kergarouët 伯爵は、続く *La Bourse* で Adélaïde 母娘の気前の良い保護者として登場し、その小説の主人公の画家 Shinner の名が *Un début dans la vie* の乗合馬車で口にされて同乗の Oscar Husson の自尊心を刺激する。*Une double famille* の Mme Grandville は *Une fille d'Eve* の二人姉妹の厳格で敬虔な母親として登場し、*Honorine* で Octave Bauvan の悲劇を聴いていた Mlle des Touches や Claude Vignon は、次の *Béatrix* の重要な狂

言廻しの役を負い、その *Béatrix* の中で、comtesse Grandlieu を助けて Béatrix を Calyste から遠ざける Maxime de Trailles は、次の *Gobseck* において Restaud 夫人を食い物にする伊達男として登場し更にその Restaud 夫人は Le Père Goriot の長女として恋人と共に父親を悩まし、Gobseck が心を許していた代理訴訟人 Derville は *Le Colonel Chabert* において、Chabert の為に Mme Ferraud と渡り合う等々、枚挙に暇がないが登場人物の糸を手繰っていけば、各作品が微妙にしかも緊密に影響し合い乍ら、ともすれば散漫になりがちな読者の興味を、*La Comédie humaine* という壮大な世界へ導いていく事に気がつくだろう。

IV

以上、*Scènes de la vie privée* における analogie や antithèse 及び retour des personnages の果す役割を考察してきたが、次にその内容に立ち入ってみたいと思う。*Scènes* は、通読して判るように、Restauration から七月王政にかけての、青年男女（その多くは貴族社会に属している）の恋愛・結婚を軸として、Balzac 自身様々な préfaces で述べているように、その無分別無思慮の苦い果実をテーマにしていると言える。彼がこうした一連の結婚訓めいた作品を発表した背景には、彼の最大の読者であり、保護者でもあった貴族夫人達の注文や嗜好を顧慮した事もあるし[18]、又1830年前後に書かれた小説は、Bardèche が言うように、

> Selon ses propres déclarations, Balzac destinait ces œuvres aux jeunes gens, tout spécialement aux jeunes filles : elles devaient leur signaler par des exemples les passages dangereux qu'ils allaient rencontrer dès leur début dans la vie.[19]

屢々教訓的な、従って単純な筋立の作品が多く[20]、*La Comédie humaine* の構想がかなり具体的になった時期の作品、*Mémoires de deux jeunes mariées* とか *Béatrix* とかになると、もっと複雑な要素が入るようになるのである

が、ここで、若い男女の恋愛（adultère を含めて）をめぐる諸事件、所謂 la vie privée の意味を検討してみよう。それはまず何よりも他人の関知しない個人の家庭の人生模様であって、その家庭の構成要素たる父、母、子、そして夫、妻それぞれの関り合いの drame の謂である。その観点から主人公と彼等の父親及び母親との関係を見てみると興味あるcontrasteに気がつく。つまり父親の存在が大きく被さるのは殆ど例外なく女性の主人公であり、彼女達の多くは父親に対して愛情と反抗の二面を示し、結婚生活も不幸な結末に終る事が多い。たとえば、Augustine (*La Maison du Chat-qui-pelote*) は保守的な権威主義の父親に育てられ、姉の Virginie が、patiente et douce であるのに対して、gracieuse であるが pleine de candeur であり、父親の忠告を無視する enfant gâté であり、Emilie (*Le Bal de Sceaux*) は un Benjamin gâté par tout le monde と描かれ、彼女の父も、

> Monsieur de Fontaine découvrit trop tard combien l'éducation de la fille qu'il aimait le plus avait été faussée par la tendresse de toute la famille. (...) Une complaisance générale avait développé chez elle l'égoïsme naturel aux enfants gâtés.(21)

修道院という世に隔絶した所から帰ってきた Louise も、友人の Renée にこう書き送る。

> Mon père a pris soudain pour moi les manières les plus tendres ; il a si parfaitement joué son rôle de père que je lui en ai cru le cœur. "Vous voilâ donc, fille rebelle!" m'a-t-il dit en me prenant les deux mains dans les siennes et me les baisant avec plus galanterie que de paternité.(22)

彼女の母親は、修道院へ便りを寄せず、Paris に帰ってからもよそよそしいのに較べ父親は彼女を信頼し政治的な教育さえ行おうとするのである。以下、煩雑を厭わず各 héroïne の父との関係を拾ってみれば *Modeste Mignon* は fille unique として父の不在の間も執事 Dumay に吾が娘の如く慈しまれ、父の帰還後はその財産の相続人として愛されるが、やはり enfant

gâté である。

> Les irrévérances de Modeste envers son père, les libertés excessives qu'elle prenait avec lui ; (...) semblaient être d'un caractère fantasque et d'une gaieté tolérée dès l'enfance.[23]

Ginévra (*La Vendetta*) も年老いた両親から掌中の珠の如く可愛がられているが、

> Ginévra ne pardonnait rien â son père, et il fallait qu'il lui cédât. Piambo ne voyait que des enfantillages dans ces querelles factices ; mais l'enfant y contracta l'habitude de dominer ses parents.[24]

と最後には、父に抗して家の仇敵の息子と愛し合い困苦の中で死ななければならない。

La Femme de trente ans のJulie は更に典型的な enfant gâté に描かれている。

> —— Ah! s'écria le père en poussant un soupir, enfant gâté! les meilleurs cœurs sont quelquefois bien cruels. Vous consacrer notre vie, ne penser qu'â vous, préparer votre bien-être, sacrifier nos goûts â vos fantaisies, vous adorer, vous donner même notre sang, ce n'est donc rien?[25]

また父と娘でなく、たとえば、Béatrix と Rochefide, Honorine と Octave, Mme Ferraud と Chabert のように、父の役割を夫が演ずる場合もあるが、*Le Père Goriot* における Delphine と Anastasie に対する徹底的な、凄惨な迄の父性愛は、*Scènes de la vie privée* における父と娘の関係の一つの象徴であろう。

一方、青年主人公についてみると、逆に母親との関係が強調されていて、先の女性達の場合と興味ある対照を見せる。Marie Gaston (*Mémoires de deux jeunes mariées*) は Lady Brandon の二番目の fils adultérin で、父について何も知らない青年であるし、画家 Shinner (*La bourse*) も私生児として生れ母の献身と母への愛情の中に人となったのである。

> Elle (Mme Shinner) vécut de son travail, en accumulant un trésor

dans son fils... il vivait pour elle, espérant à force de gloire et de fortune la voir un jour heureuse, riche, considérée, entourée d'hommes célèbres.[26]

Modeste Mignon が夫として選ぶ Ernest も早くから父をなくして、Canalis の秘書をし、Oscar Husson (*Un début dans la vie*) も、母 Mme Clapart の fils adultérin であり、その故にまた彼女の一切の希望でもあるのである。

Oscar était tout l'avenir, toute la vie de sa mère. Pour unique défaut, on ne pouvait reprocher à cette pauvre femme que l'exagération de sa tendresse pour cet enfant, la bête noire du beau-père.[27]

Albert Savarus も、小説の主人公に託して、私生児たる自分と、自分を唯一の生きがいとして育てた母について語っているし、Une fille d'Eve で Angélique を誘惑する Raoul Nathan の父は結婚と同時に死に母が Nathan を育てた事になっており、*La femme abandonnée* の Gaston de Nueil も、父と兄を共に失くし、母は彼に頼り、 Béatrix を恋する純情な青年 Calyste は典型的な母親の被護下に置かれている。Rastignac も又田舎の母親の苦しい仕送りに支えられて社交界に出入りすることが出来るのである。

つまり、*Scènes de la vie privée* の héroïnes の父親は共通して権威主義であり乍ら娘への愛情に敗け、娘は父と対抗し、その影響から脱け出ようとするのに対して、héros にとって、父親は存在そのものが稀薄で、母親の全身的な愛情によって、むしろそれを踏み台に社会に乗り出す pattern が *Scènes de la vie privée* の基調とも言えるのである。ここから、paternité と maternité の二の要素の葛藤を見て、Balzac 自身の少年、青年時代の家庭環境、彼自身は父を尊敬し、父を裏切った不倫の母を憎み、母も又彼を疎んじるという Balzac 自身の vie privée を考え、その投影をそこに見出す事もできようが、又実際 Barbéris もその著の中で彼の少年時代の家庭に触れて

> Delà vient, très tôt, la portée critique des thèmes de la "vie privée" dans l'œuvre balzacienne. Le mythe de l'enfant maudit, le mythe du père bafoué, le thème des drames cachés et des existences lentement détruites par les conflits invisibles, tout ceci va infiniment plus loin que de simples découvertes psychologiques, ou que des anecdotes.(28)

と述べているが、しかし更に考えれば、このpaternitéとmaternitéの図式は、父的権威で象徴されるsociétéと、maternitéで象徴されるnatureとの図式に発展して行くのではないか。女主人公の父的なるものへの挑戦は、sociétéへの挑戦へと変化し得るのである。*La femme de trente ans*のJulieは、Saint-Langeの司祭がsociétéへの服従を説くのに対してこう答える。

> —— Obéir à la société?... reprit la marquise en laissant échapper un geste d'horreur. Hé! monsieur, tous nos maux viennent de là. Dieu n'a pas fait une seule loi de malheur...(29)

Colonel Chabertの前妻Mme FerraudもL'*Interdiction*のMme d'Espardも、妻や母である以上に、sociétéと対抗して自己をその優越した位置に置く事を願う女達の例に数えられるが、この二つの対立は、*Mémoires de deux jeunes mariées*のLouiseとRenéeという対照的な主人公によって端的に描かれる。愛多いLouiseは堅実な友Renéeに宛てて、

> Il y a je ne sais quel appétit en moi pour les choses inconnues ou, si tu veux, défendues, qui m'inquiète et m'annonce au dedans de moi-même un combat entre les lois du monde et celles de la nature. Je ne sais pas si la nature est chez moi plus forte que la société, mais je me surprends à conclure des transactions entre ces puissances.(30)

と書き送るが、Renéeはmaternitéを強調して、

> Ce que je sens en moi me prouve que ce sentiment est impérissable, naturel, de tous les instants ; tandis que je soupçonne l'amour, par exemple, d'avoir ses intermittences.(31)

と書いて、愛の本性に奔放に生きようとするLouiseを戒めるのである。(32)

この小説が *La Comédie humaine* の構想が Balzac の頭の中でほぼ出来上っていた1841年に完成されて *Scènes de la vie privée* に入れられた事を見れば、この二人の若妻の運命は、他の女主人公達の運命の諸相の縮図のようにも思われる。

こうして、Louise, Julie d'Aiglemont, Béatrix, Comtesse de Ferraud, Mme d'Espard といった所謂 femmes rebelles に対して、Renée, Mlle des Touches, Mme Firmiani 等という femmes vertueuses が位置し、その間に、Rastignac, Nathan, Albert Savarus, Maxime といった青年が絡んでいく構図が自ずと出来上るのであるが、その中で、paternité の権化たる Goriot や Chabert, 更に *Une double famille* で父たる事を放棄した Grandville, Piambo (*La Vendetta*) 等は、厭世的な思想を抱くに至って paternité の敗残者として société から疎外されていく。

> Je suis dupe ! elles ne m'aiment pas, elles ne m'ont jamais aimé ! cela est clair. (...) Je les connais... Je suis trop bête.[33]

と Père Goriot は死の床で絶望的に叫び、Chabert は

> Vous ne pouvez pas savoir jusqu'où va mon mépris pour cette vie extérieure à laquelle tiennent la plupart des hommes. J'ai subitement été pris d'une malade, le dégoût de l'humanité[34]

と Dervile に語る。Granville も同じ調子で

> ... J'abhorre la vie et un monde où je suis seul. Rien, rien, ajouta le comte avec une expression qui fit tressaillir le jeune homme, non, rien ne m'émeut et rien ne m'intéresse.[35]

Bianchon に告白する。このような paternité の崩壊、失墜は、Balzac が、19世紀前半のフランスの現実社会、帝政末期から王政復古、七月王政へと目まぐるしく移り変る世相に、はっきり認識した現実であった。*Mémoires de deux jeunes mariées* における Chaulieu 候爵が娘 Louise に語る

> En coupant la tête à Louis XVI, la Révolution a coupé la tête à tous les pères de famille. Il n'y a plus de famille aujourd'hui, il n'y a plus

que des individus.[36]

という言葉は、作者自身のcritiqueを表明するものであろう。社会秩序の確立にその理想を置かんとする彼は、以上の四つのグループ、femmes rebelles, femmes vertueuses, 若いarrivistes, 無力な父、夫、とりわけ旧貴族の長たる父や夫達のdrameに、その観察者、調整者の役割を負わせてもう一群の人々を登場させたかの如くである。即ち、Horace Bianchon やDespleinに代表される医者、Le Curé de Saint-Lange, L'abbé Brossetteに代表される聖職者、そしてPopinotやDerville, Mathias 等に代表される判事や訴訟代理人のグループである。*Scènes de la vie privée* の幾つかが、BianchonやDerville等によって語られたり、彼等自身が語らぬ迄も、先の四つのグループのvie privéeに後の人々が何らかの形で関与してくるのは興味深い。彼等は、たとえば*La femme de trente ans, Béatrix, Une double famille*におけるcuréやabbé達、*Gobseck*や*le Colonel Chabert*の代訴人、*Le Contrat de mariage, L'Interdiction* の判事や弁護士等、その存在と行動が、小説の展開の重要なポイントとなっているのであって、Balzacが、彼等を、理想とするフランス社会確立の重要な役割を担うものと考えていた証しでもあろう。医者は人間の精神と肉体の公正な判断者として、例えばBianchonにこう語らせている。

> Crois-moi, les médecins sont habitués à juger les hommes et les choses ; les plus habiles d'entre nous confessent l'âme en confessant le corps.[37]

また聖職者は、神の正義の代弁者として、たとえばBéatrixを責めるl'abbé Brossetteは

> ... mais quand on s'y trouve aussi loin qu'y est madame de Rochefide, ce n'est pas le bras de l'homme, c'est celui de Dieu qui ramène ces pécheresses, il leur faut des coups de foudre particuliers.[38]

と断じるのである。しかし、この*Scènes*における彼等の立場を最も端的に、しかも意味深く語っているのは、l'avouéのDérvilleであろう。

> Savez-vous, mon cher, reprit Derville aprēs une pause, qu'il existe dans notre société trois hommes, le Prêtre, le Médecin et l'Homme de justice, qui ne peuvent pas estimer le monde? Ils ont des robes noires, peut-être parce qu'ils portent le deuil de toutes les vertus, de toutes les illusions.[39]

Derville は医師 Bianchon と共に Balzac が共感をもって描いている人物であるが、ここに引いた彼の言葉が、現実社会に正義を行う者として、換言すれば所謂 société と nature の調和をはかるものとして登場した彼等が、passion と egoïsme の渦巻く la vie privée で、猶傍観者たらざるを得ぬ事を表わしていることに注意すべきである。*Scènes de la vie privée* は、ここに至って単なる婦女子用の教訓的結婚諸相の mosaïque 的小説群に終るのではなく、その総体として、légitimiste Balzac の世界観を浮き彫りにし、しかも、以上の5つの階層の男女それぞれの栄光と悲惨を通して、当代の社会の巨大な存在そのものを垣間見せるのである。

V

以上、主として *Scènes de la vie privée* の personnages の分析を通じて、各作品間の連繋や Scènes の構造を見て来た。始めに述べたように、これは *La Comédie humaine* を一つのまとまった長編小説として読む事を前提として、その第一部第一章として考えてみたのである。その場合、*Scènes de la vie de province* 以下の *Scènes* との関わり方、構造の解明は、猶問題であるが、*Scènes de la vie privée* が、その題材を Paris や地方、様々な階層に亘って捉えている事から、後続の *Scènes* に対する魅力的な導入部、問題提起の章として十分成功したものと言えるのではなかろうか。

注

(1) Balzac, *Correspondance* (édition R. Pierrot), 5 volumes, Classiques Garnier,

Balzac, *Lettres à Madame Hanska*, (édtion Pierrot), 3 volumes Le Delta.
とくに後者の1834年10月26日付の手紙は有名で Balzac の自負が溢れている。

(2) A. Chancerel, *Quelle année vit naître le titre de la "Comédie humaine"*, Revue d'histoire littéraire de la France (以下 R. H. L. F. と略す) 1952, p. 462.
M. Le Yaouanc, *Note sur le titre de la "Comédie humaine"*, R. H. L. F., 1956, p. 572.
P. Citron, *Du nouveau sur le titre de "la Comédie humaine"*, R. H. L. F., 1959, p. 91.
等、Balzac が Comédie humaine の題をどこからとったか、考察しているが確とした決め手はなく、Citron の説が今の処妥当のようである。

(3) Balzac, *Avant-propos* de la *Comédie*, *La Comédie humaine*, édition M. Bouteron, 10 vol., Pléiade, Tome I, p. 3.
以後 texte は Pléiade 版を使用し C・H と略する。その他 M. Bardèche 編 Club de l'Honnête Homme 版全集 (O・C と略)、P. Citron 編 Seuil 版を参照した。
Mme Hanska 宛1834年10月18日付手紙は La Comédie humaine の前身と考えられる Etude Sociales について書かれてある。(Balzac, o. p. cit., Tome I p. 258)

(4) Félix Longaud, *Dictionnaire de Balzac*, Larousse, 1969, p. 68-p. 69. に要領よく La Comédie humaine の édition の歴史がまとめられている。尚 Béguin, *Balzac lu et relu*, Seuil, 1965 に彼の Préfaces の幾つかが再録されている。

(5) この *Scènes de la vie privée* の genèse については、O・C 版の p. 79-p. 82 迄の Notice に詳しい。

(6) Pléiade 版、Club de l'Honnête Homme 版に拠った。Citron 編 Seuil 版は *Scènes de la vie privée* に残したままである。

(7) *Autre Etude de femme* の二人の femmes criminelles がその夫の手で死に追いやられる話は、一つの結論を示しているとも考えられる。

(8) Bardèche, *Notice* de la Comédie humaine, *O. C.* Tome I p. 55.

(9) J. P. Richard, *Corps et décorps balzaciens*, in *Etudés Sur le Romantisme*, Seuil, 1970, において説かれる肉体的特徴についても、Balzac 的な l'an ogie と l'antithèse の観念が色濃く出ているように思わ

れる。それは図式的でさえある。

(10) E. Preston, *Recherches sur la technique de Balzac, le retour des personnages dans la comédie humaine*, Les Presses Francaises, 1926, は、主として技法の研究を、
A. G. Canfied, *Les personnages reparaissants dans "La Comédie humaine"*, R. H. L. F., 1934, pp. 15-31 et pp. 198-214 は主として再登場する人物のリストを、
F. Lotte, *Le "retour des personnages"*, l'Année balzacienne, 1961, pp. 227-281 は、再登場の仕方の不都合な点、とりわけ年代的につじつまの合わぬ点を指摘する。

(11) *C·H*, Tome II. pp. 347-375.

(12) *C·H*, Tome III. pp. 43-44.

(13) *O. C.*, Tome II, p. 269.

(14) *O. C.*, Tome II, pp. 269-270.

(15) *O. C.*, Tome I, p. 90.

(16) *O. C.*, Tome I, pp. 1049-1050.

(17) *O. C.*, Tome I, p. 287.

(18) たとえばMadame Delannoyは"Vous n'avez jamais rien écirit de mieux selon moi (et bien d'autre) que votre 4 vol. des *Scènes de la vie privée*. Etudiez votre sexe comme vous avez étudié le nôtre... とBalzacに書き送って激励している。(1832年7月27日付)
Balzac, *Correspondance*. Tome II, p. 77. Garnier.

(19) M. Bardèche, *Une lecture de Balzac*, les Sept couleurs, 1964, p. 299.

(20) Balzac, *Préface* de la première édition d'*Une Fille d'Eve*, *O. C.*, Tome XI, pp. 370-371 に彼自身もこう書いている。
..les Scènes de la vie privée étant destinée à représenter cette phase de la vie humaine qui comprend les émotions de l'Enfance, celles de la Jeunesse, leurs premières fautes.

(21) *O. C.*, Tome I, p. 84.

(22) *O. C.*, Tome I, p. 138.

(23) *O. C.*, Tome I, p. 540.

(24) *O. C.*, Tome I, p. 891.

(25) *O. C.*, Tome I, p. 683.

(26) *O. C.*, Tome I, p. 332.

(27) *O. C.*, Tome I, p. 628.

(28) P. Barbéris, *Balzac et le mal du siècle*, Gallimard, 1970, p. 197.

(29) *O. C.*, Tome II, p. 747.

(30) *O. C.*, Tome I, p. 210.

(31) *O. C.*, Tome I, p. 251.

(32) Renée は更に Maternité が Nature と Société の唯一の一致点と見なすに至る。

Aussi peut-être est-ce pour nous le seul point où la Nature et la Société soient d'accord. En ceci, la Société se trouve avoir enrichi la Nature, elle a augmenté le sentiment maternel par l' esprit de famille, par la continuité du nom, du sang, de la fortune. *O. C.*, Tome I, p. 250.

(33) *O. C.*, Tome II, p. 1071.

(34) *O. C.*, Tome II, p. 1144.

(35) *O. C.*, Tome I, p. 986.

(36) *O. C.*, Tome I, p. 173.

(37) *O. C.*, Tome III, p. 13.

(38) *O. C.*, Tome II, p. 571.

(39) *O. C.*, Tome II, p. 1147.

（大学院学生）